

幼稚園と小学校

幼・保・小の結びつき

由 井 正 人

偶然、信州大学教育学部附属幼稚園の創設時に、三年間幼児と共に生活する機会を与えていただいたことから、その後、幼児教育に関係するようになり、松本市の幼年教育研究会の研究委員のひとりとして勉強させてもらっている。以下、この研究会の活動内容を紹介したり、この研究会での研究を通して、私なりに感じたりしたことを述べてみようと思う。

しかし、全くの井の中の蛙で、ただ、松本市という一地域でのようすを研究を通して知ったにすぎないので、全国的な傾向とか本県の動向とかいうものではない。これを機会に、今後いろいろとご指導いただければ幸いである。

幼・保・小の結びつき

長野県には、古くから保育園が多く、幼稚園の数はきわめて少ない現状である。しかし、幼児に対する保育の内容面からみて、幼稚園も保育園もほとんど変わらないので、保育園も含めて考え

ていきたい。

本県においても、子どもたちの健やかな成長を願って、早くから幼稚園、保育園、小学校のつながりの必要性が叫ばれ、いろいろな方法で連絡し合ってきた。しかし、問題点を出し合ってもそれが解決されなのまま次の年へと移ってしまったり、解決されてよい方法がみい出しても、それが引き継がれないまま係が変わってしまったりして、どうしても長く続けられず消えていった。

小学校では、一年生の担任が就学前教育の係となり、幼稚園、保育園では、年長児の担任がおもにその仕事をしているという状態で、次の年になると、またメンバーががらりと変わってしまう、結局ふり出しに戻ってしまうといった訳で、発展をさまたげていた。

これを反省し、松本市では、なんとか前進させようと、十年あまり前より、幼・保・小からなる「幼年教育研究会」をつくり、研究を積み重ねてきた。

幼年教育研究会

この研究会は、幼児期の心身の発達に応じた組織的計画的な教育を願って、市の幼稚園連盟、保育園連盟、小学校の三者七十一施設で構成され、各園、各校一名の理事からなり、理事の中から数名がでて研究委員会をつくっている。そして、幼、保、小おたがいが理解し合って、望ましい保育や教育をすることを目的に、「望ましい人間形成の上で、幼稚園、保育園、小学校の教育はどうあったらよいか」をテーマとして研究を続けてきた。

現在では、年一回実践記録を持ちよって話し合う全体研究会と、幼・保・小交代で参観し、話し合う合同参観が一回、全体研究会や合同参観の骨子を作る研究委員会が数回もたれるまでに成長してきた。

幼・保・小の三者が、こうして子どもたちのために一つのことを話し合い、研究し合って十年あまり続けているということは、本県の他地域にも例をみず、きわめてまれなことであり、幼児教育発展の上からも、だいに育てていきたいと念じている。

研究会をはじめたころは、問題点を出し合っていたが、しばらくして、各園や小学校一年の指導計画を領域を決めて持ちよって読み合わせたり、指導上の困難点を出し合って研究した。しか

し、これでは、窓口が広すぎて焦点がしぼりにくく、討議が深まらないことから、領域（教科）を決め、ある一つの単元の一時間（幼・保では中心活動）の指導記録を持ちよって研究してみた。次に、その実践をまとめて紹介する。

実践例（一月の実践記録より）

小学校一年「日なたと日かげ」

ねらい　日なたは、日かげより明るく暖かいことに気づかせる。

日なたぼっこにいい場所を見つかったり、紙を使って明るさを調べ、座ぶとんに手をふれさせて、暖かさのちがいをとらえ、最後に日なたから日かげにはいつたりして、体でその変化をとらえさせている。

保育園五歳児「日なたと日かげ」

ねらい　日なたと日かげのちがいを比較してみたり、気温の変化に関心をもたせる。

日なたぼっこをしたり、土、霜、雪、氷、つらら等で、日なたと日かげの比較をし、かげふみ遊びから、気温のちがいに気づかせて、温度計のはたらきを、いろいろな場面を通してとらえ、興味や関心をもたせている。

保育園五歳児「冬のあそび」

ねらい 雪あそび、そりあそびなど、季節のあそびを十分楽しませるとともに、冬の自然界に目を向けさせ、季節の変化に興味をもたせる。

雪だるま作りをしたいが、南庭には雪が少ない。「どこかにないかな」から、園舎北側に白い雪がたくさんあるのを見つけ、雪運びから、「ふみかためられた所は、つるつるすべるが、少しもとけていない」や「ザラザラしている」「かたまりにくい」「上の方はかたい」「南庭はこおっていないでベタベタしている」「かたまる」など、雪遊びを通して、日なたや日かげの雪のちがいを知ったり、南庭で日なたほっこをさせて暖かさのちがいをなどを感じとらせている。

幼稚園五歳児「日なたと日かげのちがいを」

ねらい 遊びを通して、日なたと日かげのちがいを知る。

登園した子どもが、霜柱をもってきた、からはじまり「さがしに行こう」とさがしました。みんなで、園舎の北側へ行く。つららもある。「つららは、どんなとこにできるかな」から、「日かげ、日なた」にもっていき、かげふみ鬼ごっこに発展。園舎のかげにかくれたり日なたに出たりしている。つかまらないように、長い間日かげにいる子が寒がり、日なたほっこになる。こうし

て、遊びの中で、日なたと日かげにふれていっている。

幼稚園五歳児「日なたと日かげ」

ねらい 日なたと日かげの違いを観察したりして、気温の変化に関心をもたせる。

日かげの砂場で遊んでいたN君の会話「ぼくたち今砂場で遊んでいるんだ。寒いんだよう。だつてさ、ぜんぜん日があたらないんだもの」から「ここより寒い」「そりゃあ、くらべものにならないよ。ここはだいたい五度ぐらいかな」で温度計に発展。日のある所と日のあたらぬ所とは、気温の変化が違ふということが、温度計を使うことによって子どもたちに理解できた。としている。

一つの題材を扱うにしても、このようにねらいや内容が非常にさまざまである。これを計画的に発展させていくことがたいせつではないだろうか。

幼稚園、保育園へ

「温度計の扱いは、三年生でやるのだから、もっとちがう方法がなかったらどうか」「ちがいをどうしても温度計でみなければならなかったか」とたずねなくなる。「子どもから出たので扱った」そうだが、こういう器械やばかりで解決してしまおうとするこ

ろに、現代っ子の追求しようとする心の乏しさがあるように思える。

幼児なりの解決の方法はないだろうか。すぐに結論をださなくても、それを一つの題材として、また新たに教材（單元）をつくり、一定期間活動させることこそ、幼稚園の保育であると考えらる。

先生方の指導は抜群であり申し分ないのだが、とかく「その活動は何のためにするのか」それにより、「どんな力を養いたいのか」目的がぼけてしまうことがある。また、結果を急ぎすぎるあまり、見通しをもって遊ばせないため、もう少しやらせれば力がつくという時に、活動を変化させてしまうことが多い。

子ども自らが、その事象や活動を必要とした時、見通しをもった計画の上で、子ども自身の行動を通して、子ども自らが経験していく保育こそ、真の力となっていくと考える。

小学校へ

私も実際一年生を受け持ってみて、たった一日のちがい、すなわち、四月一日を境にして、全くちがった生活をさせてしまったことを深く反省している。

わくの中にはいると、よほどの勇氣と見通しを持っていないか

ぎり、児童に今までのリズムをできる限りみださないように配慮し、遊びを主体にした教育をすることは、むずかしいことである。四月一日という日があつたばかりに、小学生にされ、子どもの心も考えずにおしつけが多かったり、すぐ知的面へと急いでしまつたりした。

さらに、すでに幼稚園時代に身についた生活習慣など、幼稚園の子どものようすや活動内容を知らないために、すつかりくずしてしまつて「できていない」と嘆いていることもある。

あいさつも給食も用便も、卒園するときにはすつかりできていなのに、方法のちがいからできなくさせてしまつてはいないだろうか。もっと幼稚園に向向いて、必要な生活習慣などしつかりつかみ、抵抗なく移していくことがたいせつではなかったか。

また、入学直後も、わずか二時間位で帰してしまつた。子どもたちは、学校に楽しみを持って来ている。もっと遊ばせ、もっと子どもの心を満してやると共に、その遊びの中から、子ども同士の間関係を導きだし、生活習慣を確立していく必要があつた。

子どもから出てくる欲求を、うまく導いていくことこそ、本当の子どもの力となり、生活に生かされていくであらう。「今度こそ」と思いながら……。

（松本市立芳川小学校）